



エッセイ

星と根っこ

SCA 11期 本間 知広

柿やドングリ、モミジにイチョウ。秋になり、世界が色づき始めると、毎年思い出す話があります。

昔々の夜空には、月しかなくて寂しかった。物足りなく思った少女は灰をまいて天の川を作った。フインの根を投げ星を作った。根っこは老いと赤くなる。少女は気にせず投げたから、今でも星は赤や白に輝いている。

〔草下英明, 星の神話伝説集, 「星を作った少女」より筆者要約〕

きっと、いろんな星があるのが不思議だったんですね。いつも凄いと思うのは、遠く遠くのお星さまの色の違いの説明に、身近な植物を使うこと。手も届かない遠くのことを、届く範囲で説明してる。よくある星の神話のように、神様に委ねない。

科学の視点では、私たちが普段見る星の色をどうやって説明してるんでしょう？調べてみると、いろんな要素があるみたい。二つ簡単に紹介します。

一つ目の要素は星の表面温度。炎が熱くなっていくときと同じように、星も表面の温度が低いと赤く、熱くなるほど青白く輝く。星の温度はその星の年齢や質量で決まるそうです。若くて質量が小さい星、年取り終わりが近い星。そんな星ほど、表面の温度が低く赤い。

二つ目は星の地球からの距離。光には波の性質があり、波長が長い光ほど目に見える範囲では赤い。宇宙は膨張していて、星の光の旅路も伸びる。旅の途中で道が伸びるから、光の波長は引き伸ばされる。可視光ならば赤くなる。

お年を召した星は赤い。長旅した光は赤い。根っこの話とちょっと似てて、ちょっとほっこり。

思い出してください。お話の中では、手も届かない遠くの星の色の説明に、身近な根っこを使う。神様に委ねない。それでも、少女はどうして星が作れたか、その不思議は昔々に委ねられます。

科学者だって遥か遠くや昔には、決して手が届かない。やっぱり凄いと思うのは、それでも不思議の説明を何かに委ねていないこと。

遥か遠くや昔から手元に届く僅かな情報。手元でやってみた実験から分かった法則。それらをコツコツ積み上げていろんなことが見えてくる。科学のそんな側面を私はコツコツ階段と呼んでます。

博物館ではたくさんのワクワクする世界に出会うことができます。その裏にはコツコツ階段がきっとある。探してみても面白いかも。

今回は 2021 年 9 月より科博 SCA 新代表となった早船さんにインタビューしました。おもしろいお話がとにかく多く、どの話題をピックアップしようかととても悩みました。

次号もより魅力的な紙面を目指して制作を進めてまいります。今後も「サイエンスコミュニケーターだより」をよろしく願いいたします。

過去のイベントの実施内容は「科博 SCAblog」をご覧ください。

<http://kahakusca.edoblog.net/>



科博 SCA の広報誌

サイエンス コミュニケーター だより

Volume 16
March 2022



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）」を開講し、その修了生は 300 名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



撮影：武田美亜（SC 講座 5 期）

Question 表紙クイズ

カニはどちらを向いている？

- ①右 ②左 ③下

開いて
答えを
確認！



早船 真広
Masahiro Hayafune
 国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター(13期)、科博SCA代表、博士(農学)、Co-Lab. 代表、株式会社 A-Co-Labo 取締役COO、flasko project 代表。

Q. お仕事はどのようなことをしていますか？

A. 個人事業主や会社員、大学教員など様々な形で SC に関わる事業に携わっています。

民間企業で人事コンサルタントを務めた後、現在は個人事業主として、科学イベントの主催や出張講師、サイエンスメディアの運営などを手掛けています。また、今メインで行っているのは 2020 年 10 月に立ち上げた「株式会社 A-Co-Labo」での事業です。

私自身は博士号を取得してから企業就職という道を選びましたが、生活基盤が不安定で研究に集中できない研究者が多くいます。特に若手の研究者は任期付きの場合が多いので、将来の見通しが悪い、待遇や福利厚生があまり良くないといったことがあります。そういった研究者をサポートしたい思いがありました。また、民間企業での勤務経験から、企業には様々な課題解決のニーズがあるとも感じていました。

そこで A-Co-Labo では、大学や企業など多様な研究者と課題を持つ企業をつなぎ、企業の課題解決を目指すという事業を行っています。これは、一見すると人材紹介に思われがちですが、実際にはコンサルティングに近いです。例えば、企業と研究者が共同研究をすると、思い描くゴールが乖離していることがあるので、それを仲介して理想のゴールに導くことも仕事の一つです。私たちが間をとりもつことで、事業を円滑に進めることができます。

*右図出典：国立科学博物館編（2017）：科学を伝え、社会とつなぐ サイエンスコミュニケーションのはじめかた，丸善出版，p168

Q. 民間企業での経験で今に活かしていることはありますか？

A. 事業を進めていく上での人を見る目です。

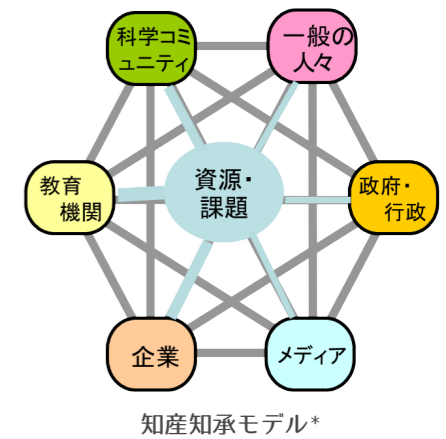
企業に勤めていた頃は、人事コンサルタントとして複数企業で採用面接官などをしていたので、毎年数千人と関わっていました。A-Co-Labo での事業は「人と人をつなぐ」ことなので、このときに得た相手の「人となり」を掴むスキルは、今に活かしていると感じます。

また、A-Co-Labo では事業を良くするために密な関係作りを心掛けています。そうすることでパートナーの本音が反映されたより良い事業を進められたり、新しい事業の芽ができたりします。「早船と飲むといい研究者を紹介してもらえ」みたいになると面白いんじゃないでしょうか（笑）

Q. ご自身の活動の軸になっていることは何でしょう？

A. SC 講座を受けて学んだ「知産知承モデル」です。

独立・起業した直後、「とりあえずやってみよう」の精神で何度か科学イベントを開催しました。当時は何の指針もなく、単に「科学を伝える」=「子供向け科学イベント」というイメージで進めていましたが、同時期に受講していた SC 講座で「知産知承モデル」を学び、SC の当事者は様々であることを知りました。講座修了後は、研究者と企業、研究者と市民をつなぐ事業を始めたり、サイエンスメディアを立ち上げたりなど、活動の幅を広げてきました。政府や行政へのアプローチはまだ着手できていないので、これから広げていきたいですね。知産知承モデルを実現できる人間になることが、今の目標です。



Q. SCA の新代表として抱負をお願いします。

A. 会員がより参加しやすい仕組みをつくり、もっと面白い団体にしていきたいです。

SCA は実はすごく多様性のある団体だと思っています。アカデミアをはじめ教育機関、メディア、行政など、会員が様々な組織に所属しているので、SC に関わるすべてをつなぐことができると思っています。15 期まで SC 講座が続いてきたことも魅力で、たとえば、講座修了生が親となったからこそ生まれる企画もあります。さらに盛り上げていけばもっと面白い組織になるはず。それぞれの関心に響くテーマやその人だから気づけた視点のイベントなどが出来たら面白いと思います。とはいえ、自分から積極的に動くにはパワーがいるのも事実です。気軽に参加できる仕組みや、活動を進めるうえでの負担が少ない体制を作っていく、SCA をもっと面白い団体にしていきたいと思っています。

Answer

①右

表紙クイズの答え

イソコンペイトウガニというカニが（緑色の線で輪郭をなぞりました）、右の方を向いています。まるく囲んだところが眼です。トゲトサカというサンゴの仲間に擬態しています。

